どうする
日本の英語教育
第21回

山田 昇司（やまだ・しょうじ　岐阜・朝日大学）

「英語で発表」は誰のため？ ―日本社会の「英語化」を考える

先月の本欄では私が参加した学会で聞いたある発表を元にしてTOEICの問題を論じたが，今回は「英語で行う授業」について考えてみたい。というのは，そのときの私の発表の前後がどちらも「英語で行う発表」で私は少なからぬ違和感を持ったからだ。

会場にいた約20名の参加者のうち外国人は２人だけなのに，どうして英語で発表する必要があるのだろうか。質疑のときは１人２人日本語で尋ねた人がいてその際は発表者も日本語で答えていたが，その他は全て英語でのやりとりだった。質疑を聞いていても報告の内容を確認するようなものが多く議論が深まった印象は感じられなかった。発表者も自分の実践を多くの人に知ってもらい有益なアドバイスをもらいたいと願っているはずなのに英語を使ったためにそれが十分にはできないのだ。発表の目的は英語授業をどう改善するのかを考えるためなのに，これではまるで英語を話す練習のための時間だ。

この学会では私は日本人が英語で発表するのを聞いたが，ここ数年間ずっと出席している別の学会の発表は日本語である。ところが，日本語で行われる発表であってもその人の実践を完全に理解できることはまれである。前もって発表概要を読み，配布されたレジュメにメモを取りながら耳を皿のようにして聞いていても難しいのだ。だから質疑応答でも意思疎通がうまく行かないことが起こる。以下のやりとりは今年の学会で私が実際に経験したものだ。

山田：パワポ６枚目に「後から必要に応じて活用できる知識の獲得が重要」とありますが，この授業では具体的には何のことを言っているのですか。

発表者：わからないことがあったら人に聞くことができるようになることです。

山田：いや，そうではなくて英語の授業に関してどんなことなのかとお尋ねしているのです。

発表者：ですから，お互い協力して学ぶことです。

山田：私がお尋ねしているのは英語という教科の中身に関わってどんな知識なのかということです。

発表者：それは，スラッシュ・リーディングなどの読み方などです。

私たちの母語であってもお互いが理解し合うことは簡単には行かないのである。これを英語でやっていたら一体どうなっていただろうか。そして，これと同じことを学校現場でやろうというのが「英語でおこなう授業」なのである。私は拙著『英語教育が甦えるとき』（2014 明石書店）の中で「自分の意思が十全に伝えられない会話のやりとりだけではコミュニケーション能力は育たない」と指摘したが，私が学会の「英語で発表」で感じた完全には理解できないもどかしさや実りの実感に乏しい学びはその指摘の妥当性を再認識させるものであった。

相手のことをあまり考えずにオール・イングリッシュにする例は他にもある。学会紀要の中には掲載論文が全て英語で書かれているものがあるのだ。これを読み通すのはなかなか骨が折れる，というか，正直に言うと私はほとんど読まない。読む時間が取れないのだ。英語論文ではなくて日本語論文を掲載してくれれば，はるかにたくさん読めて有用な情報が入手しやすいのにと私はいつも思う。

どうしてこんな不便この上ないことがずっと続いているのだろうか。もしかすると英語教師の頭の中には英語で書かれていること自体に価値があるという意識が潜んでいるのかもしれない。これは端的に言えば，英語教師の「自己家畜化」，つまり「英語バカ」（寺島隆吉 2007『英語教育原論』）の症状だ。

先に紹介した拙著で私は自分自身が罹ったことのある「英語バカ」の症例をいくつか紹介したが，ここから抜け出すのは容易なことではなかった。

そんなことを考えていたら，このような紀要や先に述べた学会発表のありようは，いま政府が推進している日本社会「英語化」の先行実験のようにも思えてきた。というのは，「英語で発表，英語で紀要」は彼らの言う「会議や各種書類の英語化の推進」という方針とぴったり重なってくるからだ。

12月p57_日本の英語教育.indd 57 15.10.2 5:51:40 PM